

たものです。この平和は、幾多の先輩の方々の犠牲の上に築かれたものであることを自覚し、日本国民として不戦の誓いを宣言実行することだと思えます。

戦争の虚しさ、平和の大切さを子孫に語り継ぐ大役を、日々心掛けていきたいと思えます。

## 私の人生

千葉県 瀧口 ハナ

私は、大正四（一九一五）年の十月十五日に千葉県夷隅郡西畑村田代（現在の大多喜町田代）で、父森川太郎左エ門、母つるの四人目の子供として生まれました。上の三人は全部女で、幼いときは貧乏ながら賑やかに過ごしていました。

小学校六年生のときに学校の掲示板で、千葉市の方の病院で看護婦の見習いを募集しているということを知りました。私は、いつも姉のお古ばかりを着せられていて、新しい物を身につけたことが一度もないので、情け無く思っていたころでしたので、看護婦の資格を取れば自分で何でも思うものが買えると思いい、すぐに先生に申し出たのです。まだ六年生の卒業までには二カ月もあるのに、早く申し込まないといっぱいになって採用してもらえなくなると思い、二月十日学校をやめて、

両親の気持ちも考えずに一人で千葉に行きました。

山の中に住んでいた者なので、まず驚いたことは、その病院の大きいのにびっくりしました。看護婦の資格を持った方が八人、産婆さんの資格を持った方が六人いました。私はその病院に住み込み、いつもみんなの洗濯物を洗ったり、お産があるとその後始末や赤ちゃんのおしめ洗い、その他の汚れ物の始末など人の嫌う仕事をさせられました。洗濯物をたらいに浸けておくと、寒いときは氷が張るぐらいの寒さでした。千葉大学病院より電話があると、看護婦の荷物を持って付いて行きますが、行きは二人ですが帰りは一人になるので、夜などは寂しくなり、寒い冬などは泣きながら帰って来たことがたびたびありました。そのころはまだ十三歳でしたので、仕方の無いことです。冬の寒いときに帰って来たときは、夜も遅くなりなかなか寝付くこともできずに、そのまま朝まで寝ずにいました。そんな日は、日中でもちよっと手がすくつついっというとうとしていました。ただだ

だ眠たいだけでした。眠くなると、新聞紙を便所に持ち込み、便器にかぶせてその上で仮眠をしていましたが、ときどきみんなから「ハナヤンがない！」と探し回られて、大騒ぎをさせたこともたびたびありました。皆さんに頭を下げて謝りましたが、自分ながら情け無く思ったものです。

明治三十四（一九〇一）年ごろには、父の弟が神奈川県郵便局に勤めていたそうですが、その後満州の郵便局に転勤させられたそうです。叔父には子供がいなかったことを、父から聞いておりましたのを思い出し、便所に紙と鉛筆を持ち込み、叔父の所に手紙を書きました。その内容は「叔父さんの子供になってもいいから、旅費と道順を書いて送って下されば、私一人でそちらに尋ねて行きます」というようなことでした。そのとき私は十四歳と三カ月になっていましたが、叔父も子供がいなくて寂しかったのでしょうか、すぐに返事と一緒に旅費として三十五円を送ってくれました。その手紙を院長先生に見せて、お暇を頂きました。

一旦実家に戻り、父に満州の叔父の所に行きたいということを相談しましたが、すぐには許してくれませんでした。父の言い分は「十四や十五の子供が、一人でなんで満州のような遠い所に行けるわけがない！」ということで、頭から反対でした。父の反対する言葉を散々に言わせておいてから、私は叔父からの手紙を見せて、汽車賃は三十五円も入っているし、道順を書いた地図も入っているのだから、これならばどこにでも行くことができると言い切りました。

やっと父も事情を了解して、許してくれました。私もとても嬉しくなりました。そのときは、今でもはつきりと覚えています。しかし、満州行きが決まったとなると別れがちよつと悲しくなりましたが、自分で自分によく言い聞かせて決心を固めました。

二日ほど経ってから近所の人々にあいさつをして、両親に東京駅まで送られて満州に向かいました。やはり覚悟はしていましたが、まだ子供であ

る女一人の旅は寂しいもので、悲しくなることもときどきありました。その都度自分によく言い聞かせて、励ましなが行きました。

朝鮮の汽車の中は一番嫌な思いました。日本人は一人も車内にはいませんでした。一日に一度ぐらい、日本人の車掌さんが見えるだけでした。千葉を出て八日目に、やっと新京（長春）に着き叔父に会うことができましたが、そのときの嬉しかったことはいまだに忘れ得ないことの一つです。

叔父の話では、満州に来たからには満州語が話せないと勤め口が無いと言われて、零下四十五度の中を、主として満人を対象にした夜学に通うこととし、夕方の五時から十時まで勉強しました。そのころは、満人の労働者は一日働いてお金が入るとすぐに酒などを飲んで、挙げ句の果てには道路上などに寝込んでいました。冬の十時過ぎになると、そのまま凍死している人もいて、死体に遭うこともあって嫌な思いました。毎日が大変な苦勞でしたが、いつも自分に言い聞かせながら

頑張っていました。

叔父は、新京の郵便局に三十年近くも勤めていたので信用もあって、私のことを局長さんに話してもらいましたら、すぐに電話の交換手に採用してもらい、郵便局に勤めることになりました。そのときは本当に嬉しかったのです。給料は、確か一カ月九十五円頂いていたと思います。当時の私の年齢からすると大変な金額でした。

それからしばらく経ったころ、多分四年近くの後と思いますが、ノモンハン事件が起きたのです。そして叔父は「お前をこのまま満州に置いておくわけにはいかない。もしものことがあったら、お前のお父さんやお母さんに申しわけがたない」と私に言っ、日本に帰ることを勧められました。信頼していた叔父に言われたので、致し方なく一度帰ることになりました。

東京までは無事に帰ったのですが、私も一度飛び出した千葉にこのまま帰ることが嫌で、意地を張って「満州にさえ一人で行ったのだから、東京

で働こう」と決心して、小石川にいる知り合いの人の所を尋ねて行き、今日までの経緯を話して、これからの身の振り方について相談しました。そしてその知り合いの人に間に入ってもらい、父に東京で働くことを許してもらいました。そして、すぐに知人の世話で小石川の日本髪専門の髪結いさんの所に行き、見習いに採用してもらいました。行き先が決まったので、ひと晩我が家に戻り、両親に日本髪専門の髪結いになることを許してもらいました。

その後、髪結所で、結局三年九カ月ほど見習い修業をして、島田、丸髷、花嫁の着付けなどでもできるようになりました。しかしながら、好事魔多しのたとえの通り、風邪をこじらせて胸を患うようになりました。病院の先生の話では「まだまだ軽い方だから、今のうちに海辺の空気の良い所に行つて静養すれば良くなる」ということでした。千葉県勝浦の勝浦に知人がいたので、その人を頼つて勝浦に行き、興津の興津館で働きながら養生する

ことになりました。三年ぐらいお世話になってい  
るうちに、体の方もすっかり良くなりました。海  
風が私に合っていたのでしょうか？ 以前の体に  
戻って、とても嬉しく感謝しました。

興津館のご主人は、興津町の役場に勤めてお  
りましたが、満州の開拓団から花嫁の募集がきて  
いるという話を、私にちらっと話されました。私  
は以前の新京時代を思い出して、すぐに花嫁に申  
し込みました。

嫁取りのご本人は興津出身の人で、満蒙開拓義  
勇軍の人でした。話ほとんどん拍子に進んで、本  
人が満州から迎えに来ました。

千葉県知事ご夫妻の仲人で結婚式も無事に済み  
ましたが、松花江は氷が流れるようになると船が  
出られなくなるので、一日も早く松花江を渡らな  
ければならないということで、式後の挨拶回りも  
できずに出発して、満州に旅立ちました。

下関から船に乗り、釜山に着きましたが、そこ  
まで六日かかった気がします。

八日目に無事に開拓団に着きましたが、荷物は  
松花江が完全に凍結しないと運ぶことができない  
とのことでした。十日ほど経ってからやっと届き  
ましたが、その間は先住の方々の寝具や衣類をお  
借りして、生活をしていました。ここは想像して  
いた以上に山奥だったので、着いてから改めて驚  
きました。私の入った部落は、千葉村といって千  
葉県の出身が十人、東京出身の方が二人で、全部  
で十二人の部落でした。食事は、慣れるまでは共  
同炊飯でした。米は全然手に入りませんので、高  
梁、玉蜀黍、大豆などが米の代わりになっていて、  
慣れない者にとっては毎食毎食泣き泣きの食事で  
した。

しかし何といっても気候が良いので、大豆、高  
梁などは蒔くとすぐに芽が出て、それからすぐに  
枝ができて、花が咲き実ができるのです。それに  
は少々びっくりしました。

何にしても広い畑ですので、草取りだけでも大  
変な仕事でした。畑仕事では、満人の労働者を雇

っていました。満人の労働者の溜まり場に行つて十人以上を連れて来ては、一畝に一人ずつ立たせて草取りをさせるのですが、夕方までに一畝をきれいに草取る人もいれば、中ほどでまごまごしている人もいて、同じ満人でもその力には人それぞれに差異がありました。そうなると、雇う方もいろいろと考えて、日当は仕事の出来高に応じて払うようにしました。できの良い人で一日五円か八円、できの悪い人で三円ぐらいのこともありました。いずれにしても現金を受け取る時には、八円の人も三円の人も、目を皿のようにしていたのが印象的でした。

広い畑のことは、今の人たちに話しても信用してもらえないことと思います。

夏の暑いときは、朝の四時ごろから十時ぐらいまで、午後は三時ごろから九時ごろまで仕事をしています。冬は零下何十度まで気温が下がるので、井戸からの水汲みが大変な仕事でした。井戸には石油缶が二個付いていますので、手で巻き上

げます。缶に井戸水が入り過ぎると、力のある人でないと上に上がってこないで大変です。やはりコツがあつて、慣れるまでは大変に苦労したものです。

狼やノロなどの凶暴な野獣が家に入つて来ないように、家の周りには深い堀を掘っていますが、これを維持するのも大変な苦勞をしました。このようにしていても、ときどき入つて来て驚かされたり、鶏などが殺される実害もありました。情けない思いをしたものです。

十月になると、気温はずつと下がってきます。地面に水をまくと、すぐに氷が張るのです。氷の張つた上に、大豆、小豆、高粱などをそのまま並べておいて、その上をセメントでできたローラーを牛に曳かせると、一町歩ほどの畑の品種が、一時間ぐらいで判別できるようになります。日本内地のように手をかけないのです。後は風の力で殻を取ります。

牛や馬などは放し飼いにしているのですが、た

まには大豆畑などに入り込んで、胃袋いっぱい食べてきては水を飲むので、胃袋はパンクしてしまい、場合によっては死んでしまうこともあります。そんなことのあったときには、ほかの部落からも特配が届くことがありました。

私の所の事故では、卵から雛に育て、やれやれこれから卵を産むようになると楽しみにしていたころ、満人が来て鶏小屋を見せてもらいたいと言われたので、小屋に入りました。鶏小屋に入るときには靴を履き換えるのですが、それをしなかったのでケイペスト菌が入ったようで、二百羽近い鶏が三日ぐらいで全部死んでしまいました。ケイペスト菌は鶏冠が黒くなり、それにかかると死んでしまいます。これもまた、情けない思いでした。

我が家は、材木が手に入らないので全部煉瓦で造った家でしたので、冬は暖房が通っていて温かくて過ごし良かったです。

いろいろな苦労はしていましたが、平穏で平和な開拓生活を続けていました。

興津の主人の実家の関係で親しくしていた、大原町出身の北奥様は、佳木斯の憲兵隊の幹部で、いろいろと世話になっていました。北奥様は、ソ連軍との戦争が起こるかもしれないということから早くから分かっておられたようで、ある日連絡があつて「こんな山奥にいると、いざというときに大変だから、今のうちに佳木斯まで出て来なさい！」とのことでした。私共もいろいろと考えましたが、せっかく苦労をしながらこれまで築き上げたこの財産を置いて佳木斯に移ることに、大変な抵抗がありました。北奥様の話を聞いているうちに、なるほどという合点もあつて、佳木斯に移る決心をしました。

畑や家畜など、それに家財道具などを整理して、使用人の満人に後の管理を頼みました。一番頭を痛めたことは、私たちの最初の子供は、栄養不良から生まれて三時間も経たないうちに息を引き取ってしまったのですが、その子の遺体を掘り出して一緒に連れて行くつもりにしていましたが、掘

り出すともう異変していて、連れて行くことは不可能な状態でした。致し方なく知り合いの満人に供養を頼んで、そのまま置いて来ました。その満人は大変に良い人で、私は安心しましたが、今でもかわいそうなことをしたと後悔する時があります。当時の開拓団では、栄養が十分に摂れなくて、どの家でも最初の子供はほとんど亡くしてしまいました。亡くなった子供の下に、四歳と二歳の男の子がいましたが、この二人は佳木斯に着くまで泣き通しました。情けない思いをしました。

荷物の整理などで思わぬ時間をとってしまい、夜中の十二時ごろ、やっと開拓団を後にしました。必要な品物だけを馬車に積みましたが、佳木斯には三日ほどかかって着きました。その馬車は、御者の満人に安く引き取ってもらいました。

佳木斯に着いてから、まず最初に憲兵隊に北奥様を尋ねて、これからのことなどをいろいろと相談しました。北奥様の引き合わせで、主人は憲兵隊長の乗馬の世話をすることになり、私は食事の

仕度や身の回りのお世話を受け持つことになりました。それまでは、憲兵隊に入った初年兵の若い二人が当番だったそうですが、あまり良くなかったそうで、私は大変に喜ばれました。

佳木斯での生活も落ち着き、三カ月ぐらいが瞬く間に過ぎたところに、国境周辺から突然として戦車を先頭に立てたソ連軍が侵入して来て、戦争状態となりました。主人はその三カ月ぐらい前に召集されて、軍隊に行っていました。

それから間もなくして、自治会の方から疎開の指示が出されました。主人は不在でしたので、私は四歳と二歳の子供を連れて、自治会の人たちの仲間に入れてもらって、指定された集合場所の佳木斯駅に向かいました。駅前には、既に疎開家族であふれ返っていました。南下する列車にはなかなか乗れずに、結局三日三晩を駅の中の石炭小屋で過ごしましたが、食べ物もなく子供には泣かれ通して、遂に私も泣き出して親子で泣きの涙でした。



四日目に、やっと汽車に乗ることができてほっと安心した途端に、今度はソ連兵が三人、車内に乗り込んで来て、「この列車から万年筆三本、腕時計三個、二十歳から三十歳までの女を出せ！」と言って銃を振りかざしていました。みんなは顔を見合わせるだけで、声も出ませんでした。そのうちに自ら名乗り出た中年の女性がいたので、私たちは内心ほっとしました。だが、後味の悪いことでした。

ソ連兵に連れて行かれた後は、体を自由にもてあそばれて、その挙げ句の果てには殺されたのではないかと思えます。本当に気の毒なことですが、だれにもどうすることもできませんでした。

やっとのことで汽車が動き出して、ほっと安心しました。二時間ぐらい乗っていたと思いますが、またそこで降ろされ、それから山越え谷越えで五日ぐらい歩かされました。自治会の幹部の人から、足手まといになる老人や子供は置いて行くように、という指示がありました。かわいそうなこ

とでした。日本人の子供は、頭が優れていると言われていて欲しがっていたので、置き去りにされた子供は中国人が喜んで連れて行ったようでしたが、老人は哀れでした。身につけていた物はみんな剥ぎ取られ、裸にされて寒さで凍死してしまいました。道の両側に何体かの遺体を見ました。その中には顔見知りの人も何人かいましたが、全く気の毒でした。

特務機関の人に知り合いがいたので、私はいろいろな面で助かりましたが、ご本人はここにはいませんでしたが、その人の奥さんと四歳と二歳の子供さん二人がいて、その子供さんは私の子供と同年令なのでごく仲良しになり、大変に助かったものです。

新京に向かう途中で、十五両ぐらいの列車が運転できない状態で停まっていたので、ここを宿代わりにしようと思って、昼日中に草を刈って干し、夕方に列車の中に敷いて布団代わりにしていました。列車宿も早く場所を取らないと入れ

なくなり、必死でした。そこでの数日の生活では、食べ物が無くなると、満人の畑に行つて南瓜などを盗んで来ては食べていました。そのときの南瓜の味は、今で言うメロンの味でした。こんなことは、今の人に話しても信用してはくれないと思います。一番困つたことは、子供に泣かれることでした。背に腹は代えられないということは、こんなときのことを言うのだと、そのときは解釈していました。

そこからさらに歩きました。新京に着く前には、二十日ほど軍の格納庫での生活も経験しました。そこで麻疹の患者がでたので、しばらく留まることになったのです。この格納庫では、四十人以上の子供が次から次と亡くなっていきました。私の連れのEさんの五歳と二歳になる子供さんも、麻疹で亡くなったのです。気の毒なことでした。亡くなった子供を洗面器で湯灌をしてやり、その洗面器で今度は私たちの食べ物を鍋代わりにして煮るので、次から次と伝染するのは致し

方ないことでした。貴重品の一つである飯盒は、たまたま手に入る米や高粱など炊くのに使うので、ふだんは使用しませんでした。

亡くなった子供さんに、二日ほど経つてからお水をお供えに行つたら、死体には白い蛆がわいていて目を覆うばかりの姿でした。私は泣きながら戻つて来ましたが、何とも致し方ないことでした。

二人の子供さんを亡くしたEさんは、七カ月になる赤ちゃんを身籠もつていたのですが、私は全然気がつきませんでした。

私は、十三歳のときに千葉の羽衣看護婦会にいたときのことを思い出しながら、Eさんの赤ちゃんを取り上げましたが、元気な男の子でした。生まれて八日目、Eさんは「ちよつと、町に用事があるので行つて来る」と言つて赤ちゃんを抱いて出掛けようとしたので、「町に行くのなら赤ちゃんを預かりますよ！」と私は言いましたが、そのまま出て行きました。

二時間ほど経つてEさんは戻つて来ましたが、

赤ちゃんの姿はなく、その代わりに自分の着る物とか食べる物を両手にいっぱい抱えていました。私は不審に思つて、「赤ちゃんは？」と聞きました。すると、Eさんは「子供を抱えていると日本に帰れなくなるので、満人に五十円で売つてきた！」という、想像もしなかつた返事が戻つてきました。私は、私が一緒にいるのにこんなことになつたら、Eさんのご主人に会つたときに私は顔が立たないと思い、私はすぐにEさんに赤ちゃんを売つてきた所を聞き、私の持つているなげなしのお金五十円を持つてその場所に行き、相手の満人を探し、いろいろと話し合ひをして赤ちゃんを返してもらい、無事に戻りました。これも、十四歳のころ満語の勉強で夜学に通つたことが大變に役に立つたのでした。そのときは、私の心に朝日が飛び込んできたごとくに嬉しかったのです。

つたものですが、その店を思い出して尋ねて行きましたが、そこは避難疎開をしたらしく、ほとんど空き家になっていました。家の中は満人に掻き回され荒れ放題で、こんにやくの粉だけは多くそのまま残されていましたので、こんにやく粉をもつて、熊本県出身の人と一緒にこんにやくを作つて売り歩きましたが、この仕事は成功で大層お金になりました。

私は多少満語が話せたので、満人部落にも平気で行つて煙草の葉を仕入れて来ては、巻き煙草を巻いて売りに歩き、これがまた面白いくらいに売れました。

新京での避難生活では、良いことばかりではありませんでした。ここまで無事に連れて来た二人の子供のうち、二歳の男の子を新京で心臓弁膜症にて亡くしました。

冬期は地面が凍りついて、遺体を埋める穴を掘ることもできないのですが、予めいざというときのために掘ってあったようで、そのことをよく知っている満人に依頼して埋葬してもらいました。埋葬が済むと番号の付いた木札をくれるので、その木札によって手間代を払う仕組みになっていました。そのときは、十円ぐらい払ったと思います。

翌年、昭和二十一年三月ごろに日本への引揚げが始まるというニュースが入ったので、遺骨にしておかなければ連れて帰れないと思い、火葬にすることを考えました。しかし、火葬にするには薪がなくてはどうにもならないと思い、以前の新京生活のときを思い出し、軍で利用していた倉庫から材木を持って来ることを考えました。そこは当然ソ連軍が占領していたので、監視の隙を狙っては、雪の降る寒い日に鋸を持って入り込み、何本かの柱を切り込んで、隙を見ては外に運び出しました。四回ほど捕まり銃で殴られましたが、こっちも必死でした。お陰で七束ぐらいの薪ができ、

有り難かったです。

薪の準備ができてから、信用のおけそうな満人を雇い、番号の付いた木札を持たせて遺体を掘り出し運びました。確か十円の日当を払ったと思います。冬の間、凍っていましたので、私がひと晩抱いていましたら、氷が溶けて息を引き取ったときと同じ感じがしてきて、火葬するのがかわいそうになって、しばらく泣いてしまいました。

しかしそれは致し方ないことで、翌朝私の手で遺体の上に薪を積み、石油をかけて火をつけました。

そのようなことがあってから間もなく、父、母が私の夢枕に立ったのです。まず、父が先に大きな数珠を肩に掛けて私の所に尋ねて来たのです。確か、夜中の十二時ごろだったと覚えています。私はすぐにお水を上げて、元気でいるようにと念じて手を合わせました。それから三カ月も経たないときに、今度は母が父と同じく大きな数珠を肩に掛けて、仏壇の前に寄って来てそこで姿が消え

たのです。それから間もなくして、日本内地への引揚げの命令がでたのです。

昭和二十一年九月八日、葫蘆島から引揚船に乗船しました。船は「山澄丸」だったと思います。引揚船での食事は、高粱米に海水に薩摩芋の茎の入った味噌汁で、大変においしかったが、やはり日本国の味でした。

葫蘆島からは、一人三百円以上持って来ることはできなかったのですが、一銭も持っていない人が多く、私も余分なお金を三百円ずつあげたのです。

「このお金はあなたにあげるのよ」と言いながら渡したのですが、日本に帰り着いて間もなくすると、五百円、千円と送って下さる方がおりました。その方たちとは、それから文通などでお付き合いをしていましたが、最近はお便りが無くなってきました。皆さん、あの世に旅立たれたのだろうか、と思います。そうでしょう、私も九十三歳ですもの、無理もないことと思います。いつも名簿を見て手を合わせるのです。寂しく思います。

新京での避難民収容所生活は約一年二カ月でしたが、多少なりとも満語が話せる私は、満人労働者の食堂で一日十円の日当で働きました。四歳になった子供はEさんをお願いして、安心して働くことができました。食堂の主人の満人は話の分かる人だったので、夕方仕事を終えて帰るときに、待っている子供や子供の面倒を見ている人にと行って食べ物を持たせてくれたことは、大変に有り難いことでした。みんなからも大変喜ばれましたが、この親切は新京での収容所生活を語るときには忘れられないことです。

さて、やっこの思いで故郷の興津駅に着きましたが、駅の改札に駅長さんと十五歳ぐらいの子供がいました。そのときその子供が、駅長さんに「乞食みたいな人が下りた！」と大声で言っているのが耳に入り、本当に情けなく思いました。すると、駅長さんが私の所に来て、「どちらから引き揚げて来られたのですか？」と言われたので、私は「満州からです」と答えました。それを聞くと、駅長

さんはすぐにその子供を大変に怒って叱り始めました。私はびっくりして駅長さんに「そんなに怒らないで下さい！」と頼みました。考えてみると、乞食みたいと言われるのも当たり前だと思えました。真つ黒に汚れているリュックサック、ぼろぼろになったごぎ、それに塗装のはがれた飯盒と水筒、凹凸になった洗面器、着ている物は着た切り雀、一年も風呂に入っていない垢まみれの体、頭には引揚地で全身に振り掛けられたDDTの白い粉がまだらになって残っている。このような資格好でしたから、乞食と言われても致し方ないでしょう。私は、子供に「ごめんね！」と言いました。

主人の家に着いたときにも、七十歳過ぎの主人の母から「三郎の嫁だったら、子供を二人連れて来るわけだが？」と言われたので、私は「二歳の子は、新京で栄養が摂れないことで亡くしました。子供のリュックサックの中に遺骨が入っています」と言っただけを出して見せ、やっと信用して

もらいました。

主人の家で一泊し、翌日に西畑村田代の私の実家に行きました。実家には姉が一人でいましたので、両親のことを聞き驚きました。新京で二歳の子を亡くし、引揚げ準備で火葬をした後に両親が私の夢枕に立ちましたが、夢は本当のことでした。すぐに姉と一緒にお墓にお参りして、無事に引き揚げて来たことを報告しました。それからは、主人の帰国を待つため主人の実家で生活をしました。興津ではいろいろな仕事をしました。働けば、やはりお金にはなりました。そのころの老人は本当にかわいそうでした。今では年金をもらって、自由な生活をする事ができて本当に幸せです。テレビはあるし、お金さえあれば旅行にも行くことができます。私の引揚げてきたころは、年寄りは何の楽しみも無く、その生活は惨めでした。私は、一日闇仕事をすると思いい掛けないほどのお金になるので、それを元手にして闇米を買って、白米のご飯を炊いて年寄りに声を掛けました。いつ

も四、五人の人が家に集まり、雑談をしながら食事をして楽しいときを過ごしました。このことは私の生き甲斐ともなりました。だが、闇仕事は危険でときどき捕まることもありました。

主人は、最後の引揚げで昭和二十三年六月に無事引き揚げて来ました。ソ連軍との戦で足に銃弾が当たり足が不自由になっていました。つらい思いをしたそうです。そのために畑仕事はできず、釣りが好きでしたので釣宿をすることにしました。結構、繁盛していました。東京の釣友(餌屋さん)から話を聞いて来た、という人が尋ねて見えました。その人は三日ほど泊まっては釣りをして東京に戻り、また三日ほどすると釣りに来るといふことを繰り返していました。

あるとき、私に紙と筆、そして墨を持って来てくれないかと言われたので、何気なく全部揃えると、その人は半紙にひと筆で「馬」という字を書き、左脇に「金馬」と書かれたので、私もびつくりして「先生！」と叫び頭を下げたものでした。

そして、「このようにおいしいご馳走を出すのでは、釣宿ではなく民宿に切り替えなさい」と言われ、それ以来、先生の申されたとおり民宿にしました。五十年近く民宿を続けましたが、平成十六(二〇〇四)年九月四日、漏電が原因で火事を起こし、大きかった建物は全部駄目になり民宿としての営業ができなくなり、大勢のお客様に申し訳なく思っています。

主人は勝浦市議を十二年勤め、間もなく喉頭癌で亡くなり、あの世に旅立ちました。情けなく思いますが、病には勝てません。

満州では、梅干しと薩摩芋だけはお金を積んでも手に入りませんでした。引揚げて来て十年ぶりに口にしたとき、嬉しくて種を捨てることができずに、水に晒して塩抜きをし、日光に干して貯め始めました。それが千個以上にもなり、主人にこれを数珠にしたいと話したら、それは結構なことだと言われて、東京の専門家に依頼して立派な数珠四組を作りました。

一番大きい種でできた数珠は、興津の海の神様である弁天様に奉納し、次に大きいのを主人が、次の大きいのを子供が、小さいのを私がそれぞれ持ちました。

今年九十三歳になりましたが、ゲートボール、ミニゴルフ、輪投げ、カラオケなどで、皆さんと話し合えるので楽しんでいますが、ミレニアという山の中での生活は、やはり寂しいものです。興津の町中までは歩くと二十分ぐらいかかるので、いつも娘が車で連れて行ってくれますが、いくら自分の娘といっても自分の楽しみに送り迎えまでしてもらい、申し訳なく思う日々です。なんとしても、年は争えませんが、気は若いつもりでも、さすが体が思うようになりません。そうかと申しても、家の中にいると自分が変になるのです。でも、皆さんが私のごとき年寄りでも仲間に入れて頂いて、感謝しています。だが、心の中では皆さんになるべく迷惑をかけないようにと、自分で自分に言い聞かせています。この年になる

まで風邪一つひいたことは一度もないのです。これが私の一番幸せなことです。いつも神様に手を合わせております。全国の引揚者の皆さん頑張りましょう。

百歳までも！